子育て環境日本一を目指すために
いま子育て中の皆さんに聞いてみました。

私の提言

宇都宮から電車で三十分の距離に魅力を感じ、矢板に住むことを決意し、家を建てた共働きの核家族です。

子どもが熱をだすなど体調を崩し、保育園からすぐにお迎えにとの電話を受けた時など、代わりに見ていただける、迎えにいってくださる方がいたらいいのになあとため息をつき、知らない土地で、時間に追われる毎日のなかで、なすすべもなく、子育て環境日本一につながるものではないでしょうか。

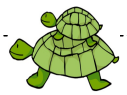
地域コミュニティのなかで、本音でコミュニケーションが取れて、助けて欲しいことを訴えることができ、それをどうやって解決していくのか、皆で考え、行動し、結果、人の役にたって、輝く笑顔があふれるまちになることを願ってやみません。

矢板にも念願のファミリーサポートセンターが設立され、さっそく登録しました。でも子育てをしている側からすると、真に困っていることを援助してもらえる体制になるためには、まだまだ工夫が必要だと感じています。

「子育てをするなら、矢板がいいわよ、子供を安心して育てられるわ」と、評判になるようなまちになることを心から願っています。（共働きの主婦・40代）

カメのその後

五年前に捜索願を出して見つけていただいた雌ガメのミドリ。そのミドリを残して、雄ガメのクロスケは、今年二月天国に旅立ちました。



去年の夏は食欲もあまりなく、今年の冬の寒さがこたえたのか、あるいは飼い主の世話の仕方が悪かったのか、原因はいくつかあると思いますが十七年間の生涯に幕を閉じました。

東京から帰ってきた娘と、今までの楽しい思い出に感謝し、庭の土の中に埋め花を添えて冥福を祈りました。

残されたミドリは食欲も旺盛で体長二十五センチ、体重一・五キロ。

この夏も二度産卵しました。（一度も孵化したことはありませんが・・・・）

ホームセンターで娘の誕生日のプレゼントに購入した、体長数センチだった子ガメが、十七年後にはこんなに大きくなりいろんな習性があるとはだれが予想したでしょうか？

「生き物を飼うとは、一つの命を請け負うことなのだ」と、改めて感じている飼い主なのであります。

【矢板の誇り】おらがまちの芸術家

暮らしの中で使えるキルトを作り続けたい
小野崎一惠さん（扇町）

キルトの発祥地はアメリカ。一八〇〇年代アメリカの開拓民が物のない時代、古着などの端布を利用してつなぎ合わせ、ベットカバーとして利用したのが始まりと言う。日用品としての普段使いが本来のキルト。そのキルトに魅せられ、独学で始めてからキルト歴三十五年。今年一月にその集大成「キルトに綴る百の物語」と題して宇都宮で展覧会を開いた、小野崎一惠さん(62歳)を訪ねた。

●手にした本との運命的な出会い

小さい頃からものを作ることが大好きだった。その延長線上で大学は被服科を卒業。パッチワークを初めて見たのは一冊の洋書で。小さな端切れをひと針ひと針つなぎ合わせ見事な作品に仕上げる。長い時間と愛情をこめて作り上げたベットカバーは子どもや孫がお嫁に行く時に持たせるそうだ。その本がきっかけで作ってみたいと興味を持ち、キルト人生が始まる。その頃は、キルトを教えてくれる場所も人もいなかったので、独学で十五年間一人で作品を作っていた。

●習いたいという人たちの声に押されて

自分の作品を家業のお店に飾っていたのもあって、教えて欲しいという声があがり、教室を開くことに。そのために東京の日本手芸普及協会で一年間学び、講師指導員の資格を取った。

自分の教室の傍ら、市の講座（アゼリア）でバックや小物を十年くらい教えたこともあった。現在は三十人限定で教室を続けている。最初からの生徒さんも多く皆熱心。苦労するのは、デザインと布の色合わせ。一番難しく、また個性の出る所でもあるそうだ。トップ（上の部分）が出来ても裏地（最後）まで気を抜かずに仕上げるよう心掛けているとのこと。

●ご主人が一番の理解者であり、厳しい評論家

アイディアが湧かない時、針が進まない時はガーデニングで気分転換。ご主人との海外旅行もよい刺激に。輝く海の色や花畑、タイルの模様などが作品作りの引き金になることも。

キルト百枚記念で本を自費出版し、出版記念に那須のサッポロ森のビール園で十一月に展示会も予定をしている。

アメリカンキルトが基本だが和ものもハワイアンキルトも作るという。またこれからは、アンティークキルトの復刻に力を入れていきたいと話はつきない。「キルトが完成して、ベッドに掛けて寝る時が一番楽しい時です」と笑顔がこぼれる。（R・K）

本の題字は父親、写真撮影はご主人が協力してくれました。

編集後記

記録的な酷暑と少雨に、人も作物も九雨間だけでなく、農作物たちもぐったり。動物たちも涼しくなって、ようやく秋は月に入って、もうそこまで来ています。実りの降り、朝晩はすっかりの豊かな農産物が孫子の代まで食べられますように…。